様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １５ 日現在

機関番号：３２５０７
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ２１９６４

研究課題名（和文）アメリカ文学における摩天楼表象の変遷

研究課題名（英文）Shifts in the Representation of Skyscrapers in American Literature

研究代表者
坪野　圭介（Tsubono, Keisuke）

和洋女子大学・国際学部・准教授

研究者番号：８０８８４２４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、19世紀末から21世紀の現在まで、アメリカ社会において摩天楼が果たしてきた象徴的な役割を、小説・詩・映画などの分析を通して明らかにした。とりわけ、20世紀転換期の初期摩天楼について、当時のアメリカにおける大衆文化の役割などと関連づけながら、動的な環境の構成要素として高層ビルが認識されていたことを分析した。研究成果は論文や学会発表において公表したほか、研究書の一部としてまとめた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の成果は、文化史・文学史の双方に対して、摩天楼という視座から見直しを行った点で学術的意義が大きいと考えられる。詩人カール・サンドバーグと建築家ルイス・サリヴァンの摩天楼に対するヴィジョンの共通点など、これまでほとんど論じられてこなかった文学・文化の連関を示すことができた。また、本研究は都市における建築という社会的関心の高い問題を取り扱っているのみならず、その成果を書籍として示し、広く議論を喚起できた点にも社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：In this study, I explored the role of skyscrapers in the United States from the end of the 19th century to the present by analyzing novels, poems, and movies. In particular, by relating popular culture that prevailed in society to skyscrapers, I showed that tall buildings at the turn of the 20th century were perceived as symbols of a dynamic environment. I published the results of this study in several papers and part of my scholarly book.

研究分野：アメリカ文学・文化

キーワード：アメリカ文化　アメリカ文学　大衆文化　建築　都市環境　摩天楼

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

1980 年代以降のアメリカ文学研究において、旧来の白人中心主義ともいえるキャノンの見直しが図られた結果、より多文化主義的な文学作品に光があたるようになった。本研究が出発点とする 19 世紀から 20 世紀の転換期は、とりわけこうした「見直し」が積極的におこなわれた対象である。一方、伝統的な文学史観が払拭されたわけでもなく、両者が混じり合わずに併存している状況がある。そのような分裂状況を再度見直し、両者をつなぎ合わせるために有効な手段が、文化史的な視点を導入しながら、両者にまたがる主題を軸にして幅広い文学作品を検証・整理していくことであると考えられる。

２．研究の目的

本研究の目的は、前述した背景をもとに、摩天楼というアメリカ合衆国を多様に象徴する文化的アイコンから見たアメリカ文学史・文化史を描き出すことである。その誕生以来、資本主義経済や国家の発展の指標としても、生活・労働・消費・娯楽の結節点としても表象されてきたこの特異な建築形態に注目することで、相矛盾する国や組織や多様な個人の交渉と衝突の歴史を提示することを目指す。

３．研究の方法

本研究では、以下の３つの時代区分を設定して、摩天楼の変化と社会状況を関連させた枠組みの整理をおこなった。①摩天楼の勃興期は 1880 年から 1930 年にあたり、移民の急増や大都市化の進展、第一次世界大戦による社会の変化、戦間期の好況などが背景となる。②摩天楼の安定期は 1930 年から 1980 年にあたり、大恐慌から第二次大戦を経た経済的繁栄、アメリカ的生活様式の普及、冷戦の展開と緊張緩和などに注目する。③摩天楼の衰退期は 1980 年から現在にあたり、アメリカの相対的な国際的地位の低下、テロリズムの脅威の増加、多文化主義の進展と反発などを主な社会状況とする。

①の時期には、シカゴ万博の「ホワイト・シティ」に予告された大都市化が急速に進み、高層ビル建設ラッシュが起きる一方、ヘンリー・ジェイムズのような白人男性作家から、サダキチ・ハートマンなどの移民作家、ネラ・ラーセンのような黒人女性作家まで、多様な立場の作家たちが摩天楼への批判と賛美を作品に著した。エンパイアステートビルの完成とともに始まる②の時期には、『キングコング』（1933）や『エンパイア』（1964）など、主に映像作品を通して、摩天楼がアメリカ社会のアイコンである事実が世界に示された。③の時期には摩天楼建設の中心地がアメリカからアジア・中東へ移行するなか、同時多発テロ事件による世界貿易センタービルの崩落が決定的なきっかけとなり、ドン・デリーロ、ジョナサン・サフラン・フォアなど多くの作家が、衰退や落下など新たなイメージを付して摩天楼を描いた。

以上の枠組みにもとづいて、各作品と歴史資料の詳細な検証を組み合わせながら摩天楼像の諸相を記述し、そこに反映されたアメリカ社会の特質を同時に分析する。とりわけ摩天楼の擬人化という現象に焦点を合わせ、「巨人」や「怪物」として描かれる高層ビルが、どのような社会的背景を背負い、どのような矛盾する立場の葛藤を内部に抱え、時代とともにどのような変化を遂げてきたかを明らかにする。

４．研究成果

本研究の成果として、アメリカ合衆国のメトロポリスの諸相が刻まれた複数の作品分析を発表してきた。摩天楼を含む都市の構造物が、アメリカ社会においてどのような象徴的役割を担ってきたかを、時期やジャンルの異なる多様な作品の検証や歴史・文化的な検証を通じて明らかにした。

2021 年度にはまず、論文「『グレート・ギャツビー』と遊園地」（和洋女子大学紀要）において、摩天楼が建ち並んだ 1920 年代のニューヨークが、遊園地に象徴される危険と快楽を併せ持つ空間として、さらには帝国主義的な想像力を孕む万国博覧会に似た空間として想像されていたことを、F・スコット・フィッツジェラルドの代表作『グレート・ギャツビー』（1925）の分析を通じて明らかにした。『グレート・ギャツビー』は上述した①摩天楼勃興期と②安定期を橋渡しする作品であり、同作品の検証によって、空間表象・建築表象の変化を捉えることができた。物語中、その変化はニューヨークに未来を見るジェイ・ギャツビーと、ニューヨークに過去を見るニック・キャラウェイという二人の主人公によって象徴されている。同じ年度に発表した論文「『マクティーグ』のトリック――初期映画とメタフィクション」（和洋女子大学英文学会誌）では、アメリカ西部の都市に宿る想像力を検証した。「サンフランシスコの物語」という副題のついたフランク・ノリス『マクティーグ』(1890)は、様々なかたちで娯楽的想像力が都市に張り巡らされている様子を表現し、また作品全体を一種のメタフィクションとして提示することで、その想像力を文学形式の構築に利用している。

2022 年度には、口頭発表を行った「遊園地と都市文学――アメリカン・メトロポリスのモダニティ（1893-1925）」において、摩天楼のみならず、街灯、交通機関、集合住宅など、都市を構

成する構造物が、どのような役割を担い、どのような想像力を人々に喚起していたかを考察した。また、20 世紀中旬から活躍したパトリシア・ハイスミスのエッセイの翻訳『サスペンス小説の書き方―パトリシア・ハイスミスの創作講座』（フィルムアート社）を発表し、20 世紀後半のジャンル小説に現れる都市的な共同体やアメリカ的主題を探った。

2023 年度には、論文“Coney Island as a Symbol of North America for Half-Outsiders: Through the Eyes of José Martí and Nagai Kafū”（*Finisterre II: Revisiting the Last Place on Earth*, Waxmann Verlag GmbH）を発表した。本論文では、一定期間アメリカに移住し、内部からと外部からの両方の視点からアメリカ社会を見つめた、ホセ・マルティと永井荷風という二人の作家が、ニューヨークのコニーアイランドをアメリカの都市社会と重ね合わせる過程を検証した。同時に本論文は、両作家が観察したニューヨークの諸相が、現在のニューヨークにも引き継がれていることを結論としている。また、研究書『遊園地と都市文学―アメリカン・メトロポリスのモダニティ』（小鳥遊書房）第 4 章では、シカゴの初期摩天楼の設計を多く手がけた建築家ルイス・サリヴァンと、シカゴの摩天楼を詩に描いたカール・サンドバーグを中心に、摩天楼がどのような構想のもとに生み出され、そのヴィジョンがどのように変質していったかを検討した。

新型コロナウイルス感染症の流行などによって、当初の予定通り研究が進まない部分もあったが、最終的には、多くの時代や作家を扱いながら、さまざまな角度から摩天楼表象のありかたと変遷を検証することができた。また、研究成果を論文のみならず書籍の形で広く社会に開くことができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 坪野圭介	４．巻 62
２．論文標題 『グレート・ギャツビー』と遊園地	５．発行年 2021年
３．雑誌名 和洋女子大学紀要	６．最初と最後の頁 63-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18909/00001979	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 坪野圭介	４．巻 56
２．論文標題 『マクティーグ』のトリック：初期映画とメタフィクション	５．発行年 2021年
３．雑誌名 和洋女子大学英文学会誌	６．最初と最後の頁 52-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Keisuke Tsubono	４．巻 2
２．論文標題 Coney Island as a Symbol of North America for Half-Outsiders: Through the Eyes of Jose Marti and Nagai Kafu	５．発行年 2024年
３．雑誌名 Finisterre	６．最初と最後の頁 113-129
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 坪野圭介
２．発表標題 遊園地と都市文学：アメリカン・メトロポリスのモダニティ（1893-1925）
３．学会等名 東京大学現代文芸論研究成果報告会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計2件

1．著者名 パトリシア・ハイスミス（坪野圭介訳）	4．発行年 2022年
2．出版社 フィルムアート社	5．総ページ数 228
3．書名 サスペンス小説の書き方：パトリシア・ハイスミスの創作講座	

1．著者名 坪野 圭介	4．発行年 2024年
2．出版社 小鳥遊書房	5．総ページ数 296
3．書名 遊園地と都市文学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関